第５回米百俵賞受賞

（平成 13 年 6 月 15 日表彰）

オーガスティン・アゾチマン・アウニ（ガーナ共和国）

母国のガーナ共和国のプアルグ村の教育支援のため、小学校を建設するなど、初等教育の充実に尽力した。

■受賞時プロフィール

昭和 63 年に来日し、平成２年に国際大学（旧南魚沼郡大和町）を卒業。長岡造形大学などで英語の講師も務めた。

平成６年にガーナに一時帰国したアウニ氏は、故郷プアルグ村で屋根もない教室で強い日差しを避けながら、机やいすがないため床に寝そべって授業を受ける子どもたちの姿を見て、教育支援を決意。

日本に帰国後、長岡市内の小学校、中学校、高等学校でガーナの教育事情を訴え、文房具を送る運動を始めた。平成９年には小学校の校舎屋根の修理などの施設整備を目的とした支援組織ができ、氏は不用になった贈答品のバザーなどで地道に支援金を集めた。

こうした日本からの支援活動がプアルグ村周辺に知られ、プアルグ小学校に通う児童数は 350 人から 600 人に増えた。平成 11 年、現地の教育委員会による新校舎建設が決まったが、喜びもつか

▲机がないので寝そべって勉強をしていたガーナ・プアルグ村の小学生たち

の間、ガーナの経済状況の悪化のため、建設計画は中止に。

支援金を持ってガーナを訪れた氏は、そのことを聞き、どうしても新校舎を建設しなければならないと決意する。そして平成 12 年、大学院進学のための貯金を取り崩し、小学校建設基金を創設するとともに寄附金集めに奔走した。氏の努力のかいあって、平成 12 年 5 月に小学校の新校舎建設が始まった。

氏は機会あるごとに語る。「日本に来て知った小林虎三郎の教育理念こそが後世の人々に受け継がれる最も不朽の遺産である。ガーナは豊富な資源もあり人もいる。なのになぜ貧しいのか。それは、教育がないからである。教育がなければ村の発展もなく、大都市との貧富の差は大きくなるばかり。小学校再建をきっかけに、村全体の自助自立のシステムを作りたい」

長岡で人材育成に情熱を傾けた小林虎三郎のように、氏は「教育こそ国の財産である」という信念でガーナの小さな村の初等教育の充実に力を注ぐ。

▲平成 13 年に寄附集めに走り回って建設したプアルグ小学校